

「こころのケア」シンポジウムを開催 ＜東日本大震災におけるこころのケアー復興期の現状と課題＞

去る平成23年11月17日（木）、兵庫県こころのケアセンターにおいて、「こころのケア」シンポジウムを開催しました。

研究報告とパネルディスカッションの2部構成で行い、当日は、幅広い年代、様々な職種の方、約170名が参加し、多様な観点から「こころのケア」の現状と課題について認識を深める場となりました。

【研究報告】

兵庫県こころのケアセンターでは、精神科医や臨床心理士が「こころのケア」に関する実践的研究に取り組んでいます。パネルディスカッションに先立ち、3人の主任研究員がそれぞれの研究内容について報告を行いました。

「風水害が被災者の心身の健康にもたらす影響ー平成21年台風9号（佐用水害）被災地域における健康調査の結果から」 藤井千太 主任研究員

被災後1年から2年の経過で、精神健康に関する尺度の結果は軽快傾向を示していた。しかし、スクリーニングによってPTSDやうつ病、不安障害の可能性が高いと判断された被災者の割合は、統計学的には明らかには低下していなかった。被災の影響からの十分な回復のためにはもう少し時間が掛かると考えられた。

「災害により死別した遺族の心理的影響」 宮井宏之 主任研究員

震災により家族を喪った遺族について、16年という年月を経てもなお心身の影響が存在し、およそ半数にPTSD症状やうつ症状、悲嘆反応、生活の質（QOL）の低下を認めたことから、長期的視点からのケアの提供が必要な遺族の存在が示唆された。よって、悲嘆の評価や介入法について、国内においても十分に検討されていくことが今後の課題であるとの報告がされた。

「東日本大震災と災害救援者ー惨事ストレスの影響について」 大澤智子 主任研究員

東日本大震災に派遣された緊急消防援助隊151名を対象に調査し、予想した状況をはるかに超えていた、悲惨な光景だった、現場での作業にも無力感を抱いた、十分な活動ができなかったという意見が多く出ているが、PTSDのような反応は非常に低く2.6%しか見られなかった。これは残った隊員が雑務をこなし後方支援してくれたことが大きいのではないかと報告された。

【パネルディスカッション】

「東日本大震災におけるこころのケア」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

・パネリスト

田中 究（神戸大学大学院医学研究科准教授）

林 みづ穂（仙台市精神保健福祉総合センター所長）

小原 聡子（宮城県精神保健福祉センター技術次長）

・コーディネーター

加藤 寛（兵庫県こころのケアセンター副センター長）

田中 究（神戸大学大学院医学研究科准教授）

震災直後に兵庫県のこころのケアチームとして現地に入ったときの活動を紹介、こころのケア活動というのは、精神医療ではなく広義の精神保健活動だろう。被災者は患者ではないということとを認識しなければならないと指摘した。

林 みづ穂（仙台市精神保健福祉総合センター所長）

震災発生から今日までの経過と兵庫県こころのケアチームとの関わりについて紹介し、仮設住宅へ入居した現在の状況について、復興が進むにつれて人により差が出てきているとの報告。保健所における地域精神保健福祉活動を基盤に据えたこころのケア活動の重要性を強調するとともに、阪神淡路大震災での経験を踏まえながら「現地の邪魔をしない」ことを基本に支援活動を行った兵庫県チームに対する感謝を述べた。

小原 聡子（宮城県精神保健福祉センター技術次長）

地域精神保健システムの復旧から復興へというなかで、長期的な視点に立ったガイド役が今後必要であり、新しいマンパワーとして人材育成をするために継続的な専門支援も必要。また、インターネット時代ですべてが外へ出てしまうことへの情報の管理を考える必要があること、長期的なこころのケア活動には地域のニーズに沿った形で地域の人たちで関わっていくことが重要ではないかと指摘した。